

Sports Graphic Number1083(2023. 10. 26 発売)の表紙開いて2ページ目の「FACE」という特集ページに本学陸上競技部・村上来花(2)が掲載されました。



FACE
延命悠大=写真
photograph by Yuda Emmel
text by Yuya Honda=Number

ハンマー投げ
村上来花
Raika Murakami

2004年1月13日、青森県生まれ。兄姉の影響で陸上を始める。中3からハンマー投げを始め、弘前実業高校3年時に日本選手権3位入賞。九州共立大進学後、国際大会でも活躍。自己記録の65m33は日本歴代5位、165cm

ワイヤリの先に鈍く光る4kgの鉄球。19歳の村上来花がハンマーと出会ったのは中3の夏だった。短距離選手として全中を終え、顧問の勧めで投げてみることに。「周りのみんなが結構苦戦してるのを見てたんですけど、やってみると『え、自分案外飛ばやん』って」。スローワーとして開花した瞬間だった。「高校に入って短距離とどっちをやるか迷ったんですけど、投擲の方が練習が楽かもって思って投擲にしました(笑)。そしたらめっちゃくちゃいい!」2時間ひたすら投げ、ウエイトで身体にダメージを与え続ける日々。厳しい練習の成果はすぐに出始めた。青森・弘前実業高校で高1歴代最高記録を更新。高2で高校生女子として初めて60mを投げ、高3で日本選手権銅メダルに輝いた。順調な競技人生に試練が訪れたのは高3の11月。左膝半月板を損傷し全治6か月の怪我を負った。しかし、そんな状況でも村上は前を向いていた。進学予定だった九州共立大に、早くも乗り込んだのだ。「青森にいても何も出来ないから早めに北九州に来ました」。九共大は投擲の強豪として知られ、村上も高校在学中から練習に参加していた。リハビリに励んで復帰し、定田晃久監督の指導で安定感を身に付けると、昨年8月にはU20世界大会で銅メダルを獲得。その翌月にはインカレ優勝を飾った。驚異のスピードで成長し続ける彼女のエネルギー源はというと。「最近は一郎系ラーメンノアシア選手権の前は2日連続で食べました(笑)」。今年7月、初のシニア国際大会となったアジア選手権では3位入賞を果たし、笑顔マンシムで表彰台に立った。今後の目標は大学在学中のインカレ4連覇。その先に24歳のマッカーサージョイが更新した日本記録(69m89)がある。「まだぜんぜん届かないんですけど、70m台はいつか出してみたいと思います」